

オノマトペの音韻

工藤 真子

1 調査の目的

今回の調査では、気仙沼市方言において用いられるオノマトペの清濁対立の実態を明らかにすることを目的とする。

共通語オノマトペにおいては、語基頭の清濁対立による意味の強化が知られている。例えば、「ポキポキ」と「ボキボキ」のようなオノマトペ対では、オノマトペの意味の中心である語基「ポキ」の語基頭が「ボキ」のように濁音になることで、より強い意味を表すようになる。

東北方言で用いられるオノマトペについても同じように清濁対立による意味の強化がみられるが、その実態については、先行研究によって異なる見解が示されている。例えば津軽方言を研究した浜野（2014）では、「津軽方言では、有声音を使うことによって、例えば、「ポキ」<「ボキ」<「ボギ」というように3段階で意味を強めることが可能である」（p.12）と3つの対立が存在するとされる一方、寒河江市方言等について研究した川越（2012）では、「東北方言では「カタカタ」に対する濁音の語は「ガダガダ」となり、第2語基音も濁音化している上、鼻濁音化もしている」（p.43）と、浜野（2014）と異なり「カタ」<「ガダ」の2つの対立であるとしている。また、川越（2012）では第2語基音の発音についても言及しており、「ダ」の子音が鼻濁音で発音されるとある。

こうした語形の対立、ならびに発音の実態はどのようになっているのであろうか。そこで今回の調査では、気仙沼市方言において用いられるオノマトペについて、これらの語形対立と発音の実態を検証する。

2 調査の概略

今回の調査に先立ち、2023年8月9日・10日に行った方言調査（工藤ほか2024）では、70代～90代の話者3名に対し、清濁対立のある子音を含むオノマトペ対について調査を行った。その結果、第2語基音がk-gの対立となっているオノマトペ対について、3つの対立が認められる場合があることが分かった^{注1}。しかしながら、その発音については、話者3名とも一般語の発音「上げる」については鼻濁音を使用したものの、オノマトペ「どぎどぎ」「びがびが」「がぐがぐ」については鼻濁音の出現は確認できなかった。また、2023年度の調査では話者の人数が3名と少なかったことが起因している影響を排除できなかった。

そこで今回の調査では、世代別多人数に対して調査を行い、より詳細に実態を把握することを試みた。昨年度の調査結果に基づき、3段階の対立が抽出できる可能性が高いと推測されるオノマトペ対「ぴかぴか」「びかびか」「びがびが」を対象とした。調査では雷が光る様子をうつした3種類

の動画 A, B, C を用意し、それぞれの雷の光の様子をオノマトペで回答してもらった^{注2}。3 種類の動画 A, B, C は、 $A < B < C$ の順に光の程度が強く・激しくなるように設定し、それに応じて、目標語形として A : ぴかぴか, B : びかびか, C : びがびが が出現することを期待した。

話者には、事前にオノマトペという語類について説明し、オノマトペで回答を行うよう求めた。調査では、動画 3 種を一度すべて流した後、1 つの質問につき 1 回ずつ、それぞれの動画を再生し、「このような光の様子をどのように言いますか？」と尋ねた。目標語形が自発的に出現した場合には再度発音を求めた。目標語形が自発的に得られなかった場合には即座に文字カードを提示し当該語形を使用するか否かを尋ね、使用する場合には 2 度発音を求めた。

3 調査の結果

3.1. オノマトペの出現率

前述のとおり、動画 A (ぴかぴか)、動画 B (びかびか)、動画 C (びがびが) の各映像を提示し、話者が光の様子をどのようにオノマトペで表現するか調査した。結果の整理に当たっては、目標語形が自発的に出現した場合ならびに文字カード提示で出現した場合を「出現あり」、いずれでも出現しなかった場合を「出現なし」と判定した。

表 1 世代別の目標語形出現

		動画 A	動画 B	動画 C
高年層	出現あり	18 (82%)	5 (23%)	17 (77%)
	自発的に出現	11 (50%)	2 (9%)	14 (64%)
	文字カード提示で出現	7 (32%)	3 (14%)	3 (14%)
	出現なし	4 (18%)	17 (77%)	5 (23%)
	動画 C 以前に「びがびが」が出現	2 (9%)	12 (55%)	0 (0%)
中年層	出現あり	18 (90%)	8 (40%)	20 (100%)
	自発的に出現	15 (75%)	2 (10%)	15 (75%)
	文字カード提示で出現	3 (15%)	6 (30%)	5 (25%)
	出現なし	2 (10%)	12 (60%)	0 (0%)
	動画 C 以前に「びがびが」が出現	1 (5%)	10 (50%)	0 (0%)
若年層	出現あり	19 (90%)	4 (19%)	19 (90%)
	自発的に出現	10 (48%)	2 (10%)	11 (52%)
	文字カード提示で出現	9 (43%)	2 (10%)	8 (38%)
	出現なし	2 (10%)	17 (81%)	2 (10%)
	動画 C 以前に「びがびが」が出現	0 (0%)	11 (52%)	0 (0%)
少年層	出現あり	16 (80%)	11 (55%)	10 (50%)
	自発的に出現	12 (60%)	5 (25%)	4 (20%)
	文字カード提示で出現	4 (20%)	6 (30%)	6 (30%)
	出現なし	4 (20%)	9 (45%)	10 (50%)
	動画 C 以前に「びがびが」が出現	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

それぞれの回答数とその割合を表 1 に、目標語形が出現した場合に焦点を当てた結果を図 1 に整理した。なお後述するように、今回の調査では、動画 C 以外の動画の雷についてもオノマトペ「びがびが」を回答した話者が多かった。その結果を分かりやすく示すため、表 1 中には「動画 C 以前に『びがびが』が出現」という行を設けた。

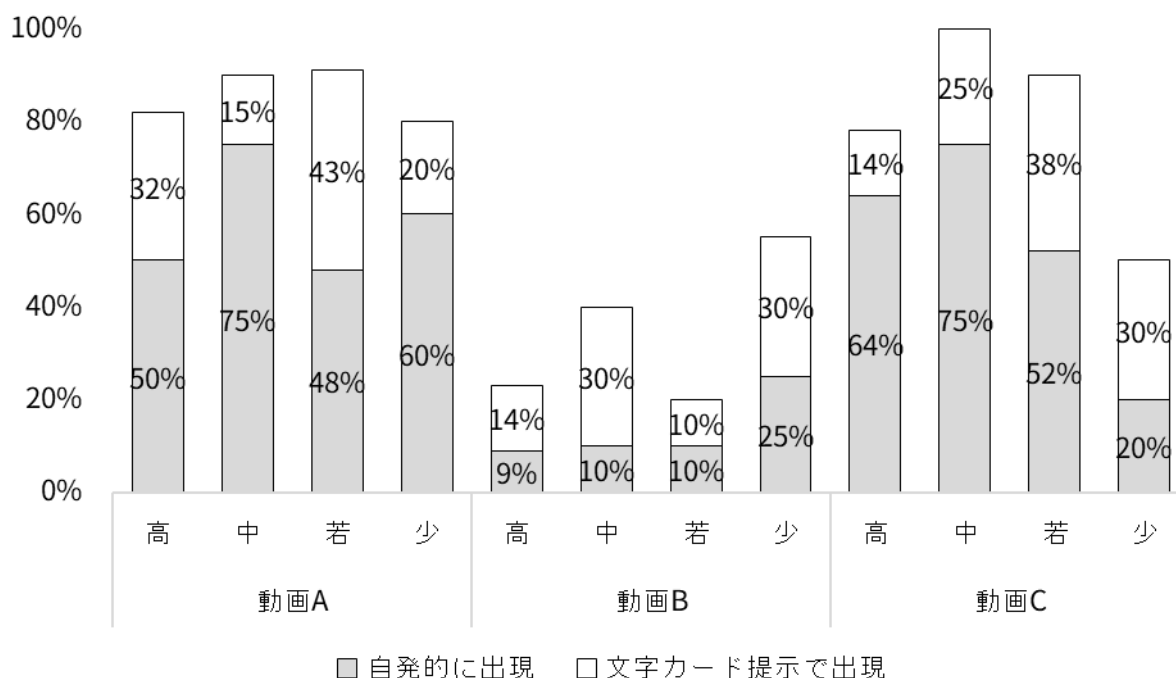


図 1 目標語形の出現率とその内訳

上記の図表から、今回の調査の結果としては、大きく次のような傾向が見られた。

- ① 動画 A・C では目標語形が比較的高い頻度で出現したが、動画 B では出現率が低かった。
- ② 「びがびが」の使用は高年層～若年層で比較的多く見られたが、少年層では減少した。
- ③ 少年層ではいずれの動画においても半数以上目標語形が出現した。
- ④ 「びがびが」が動画 C 以前に出現する話者が一定数いた。
- ⑤ 「びがびが」の自発的な使用率は世代によって異なり、少年層では特に低かった。

以下、それぞれについて詳しく見ていく。

① 動画 A・C では目標語形が比較的高い頻度で出現したが、動画 B では出現率が低かった。

図 1 からは、各動画における目標語形の出現率が把握できる。「自発的に出現」と「文字カード提示で出現」を合わせると、動画 A (びかびか) ではいずれの世代も 80%以上、動画 C (びがびが) では高年層～若年層で 78～100%、少年層で 50%目標語形が得られたのに対し、動画 B (びかびか) では高年層～若年層で 20%～40%程度、少年層で 50%と、特に高年層～若年層で動画 A・C に比べ

目標語形が得られた割合が低くなっていることが分かる。このことから、特に高年層～若年層の話者にとって「びかびか」が馴染みのある語形ではなく、雷の光の様子を表すオノマトペとして「びかびか」「びがびが」の二項対立が主に認識されていたものと推察される。

② 「びがびが」の使用は高年層～若年層で比較的多く見られたが、少年層では減少した。

①でも述べたとおり、動画 C（びがびが）では高年層～若年層で 78～100%と非常に高い割合で目標語形が得られたのに対し、少年層では 50%とその出現が半数にとどまった。

③ 少年層ではいずれの動画においても半数以上目標語形が出現した。

ここで少年層の割合に注目して図 1 を見ると、動画 A（びかびか）で 80%、動画 B（びかびか）で 50%、動画 C（びがびが）で 50%目標語形が出現していることが読み取れる。動画 A では高年層～若年層と同程度の高い割合で目標語形が出現したが、動画 B・C では目標語形が出現するか否かは半々であると読み取れる。しかしながらいずれの動画においても半数以上は目標語形が出現しているとも読み取れ、少年層においては雷の光の様子を 3 段階の対立ととらえている話者が一定程度存在することが分かる。

ただし、もう半数の話者にとっては、雷の光の様子は「びかびか」系列で表わされるものという認識は薄いものと推察される。実際に、少年層においては動画 B・C の第一回答として「ごろごろ」（6名）、「ぎらぎら」（5名）、「びりびり」（4名）が回答されており、雷の光の様子は多様なオノマトペで表わされていた。

④ 「びがびが」が動画 C 以前に出現する話者が一定数いた。

①で動画 B（びかびか）の目標語形出現率が低いことを述べたが、表 1 の「動画 C 以前に『びがびが』が出現」行を見ると、その理由の一つが明らかになる。その割合は高年層では 55%、中年層では 50%、若年層では 52%と、高年層～若年層の約半数が動画 B の雷について「びがびが」を使うと回答したことが分かる。言い換えると、高年層～若年層では動画 B・C の雷の光の様子を表す際に、同じオノマトペ「びがびが」をもって表す話者が約半数いるということになる。これは、①で述べた雷の光の様子を表すオノマトペが二項対立であるとの推察を補強する。

さらに動画 A においても「びがびが」を使うと回答した話者が高年層で 2 名、中年層で 1 名おり、これらの話者は動画 A・B・C すべての段階において同じオノマトペ「びがびが」をもって表す。このような話者は少数派であるが、気仙沼市方言において雷の光の様子を表すオノマトペとして「びがびが」が根付いていることを裏付ける。

ここで注目されるのが、「びかびか」の文字カード提示によって「びがびが」を発音した話者が多数見られたことである。この結果は、話者が「びかびか」という語形を認識しながらも、実際の発音において「びがびが」を選択した可能性があることを示している。この現象は、東北方言の清濁対立のあり方と関連する可能性がある。川越（2012）では以下のように、東北方言において「カタ

カタ」に対する濁音形が「ガタガタ」ではなく「ガダガダ」であることを述べるが、今回の調査結果は、上述のとおり、話者によっては「びかびか」カードに対応する語形として「びがびが」を用いていたケースもあることから、話者にとって「カタカタ」に対する濁音形が「ガタガタ」である可能性も存在していると言える。

通常東北方言の多くでは、「旗 (hata)」と「肌 (hada)」を区別する際、2 拍目の音について「旗」は「hada」と発音し濁音となるが、「肌」は「handa」などのように鼻濁音化して区別する。これを共通語の清濁対立と照らし合わせれば、「カタカタ」を濁音化するだけでは第 2 語基音は鼻濁音化しない。つまり、「カタカタ」に対する濁音形は、もとより「ガダガダ」という全体が濁音化した形なのであり、「ガダガダ」の第 2 語基音は鼻濁音によって発音されるのが普通である。(p.43)

この詳細については今回の調査データの音声を詳しく分析する必要があるが、第 2 語基音の分析によって、一般語における有声化・鼻音化現象との関わりを明らかにできる可能性がある。

⑤ 「びがびが」の自発的な使用率は世代によって異なり、少年層では特に低かった。

このように雷の光の様子を表すオノマトペとして好んで用いられるオノマトペ「びがびが」の出現について、「自発的に出現」と「文字カード提示で出現」の割合に注目すると、ある世代差が読み取れる。図 1 の「動画 C」に着目すると、高年層で 64%、中年層で 75%が自発的に出現しているが、若年層では 52%と自発的に出現する割合は約半数にとどまった。そして、少年層では自発的に出現する割合は 20%と非常に低い割合となっている。

さらに、「自発的に出現」と「文字カード提示で出現」の割合は、高年層・中年層では「自発的に出現」が全体の高い割合を占めるが、若年層では「文字カード提示で出現」が 38%と「自発的に出現」の 52%に肉薄し、少年層では「文字カード提示で出現」のほうが多くなっていることが分かる。

「文字カード提示で出現」が多いことは、オノマトペ「びがびが」が理解語彙もしくは使用語彙ではあるが、日常でよく用いる語彙ではない話者が多いことを示唆する。実際に、少年層の話者では 2 名から「『びがびが』は母親が言う」「『びがびが』はおばあちゃんとか年が上の人が使っているイメージ」という回答があり、伝統的な気仙沼市方言においては「びがびが」が使用されていたものの、共通語化に伴い「びがびが」の使用は衰退しているものと推察される。

①～⑤の結果からは、川越 (2012) の「2 対立」モデルが高年層～若年層に広くみられることが明らかになる。しかしながら、高年層・中年層においてはその対立が顕著であるものの、若年層～少年層にかけては「びがびが」が徐々に衰退し、共通語の「びかびか」の流入によって浜野 (2014) の「3 対立」モデルを有する話者が増加、少年層においては半数程度が雷の光の様子を 3 つの対立と認識していることが明らかになった。しかしながら、少年層のもう半数は「びかびか」系列にこ

変わらず光の様子を様々なオノマトペで表しており、雷の光の様子については、徐々に清濁対立にとらわれない様々な形式を用いた表わし分けがなされるように変化していることが明らかになった。

4 本調査の手法

ところで今回の調査では、2節で述べたように、調査手法として動画提示による方法を採用した。これは、オノマトペが自発的に出現する可能性の高い手法を用いることを目的としたものである。

本調査に先立って行った 2023 年調査（工藤ほか 2024）では、オノマトペを求める方法として、一般語彙の調査と同様に「なぞなぞ式」を用いた。例えば、オノマトペ「べたべた」については、「汗で衣服が体にはりつく様子を、どのように表しますか」というなぞなぞを用意した。そして、なかなか目標語形が出現しなかった場合には語形カードを使用して読み上げてもら方法をとった。

しかしながら、この方法では、オノマトペが自発的に出現しないケースが相当数みられ、また自発的に出現した場合でも、回答までに時間を要することが多かった。そのため、調査時間に厳密な制約がある今回の調査には「なぞなぞ式」の手法は適さないと判断し、より即時的な反応が得られる方法として動画提示法を導入するに至った。

動画提示調査は、画像提示調査と比べて話者に喚起されるイメージを高い精度で統制でき、また動画が時間的展開を持つため、反復語形が出現しやすいという特長がある。こうした点から、目標語形がより即座に回答される可能性があると考えた。

実際の調査においても、図 1 から読み取れるとおり、動画 A および動画 C では文字カードを提示せずとも自発的に行った話者が相当程度おり、また、結果的に文字カード提示によって回答を得られた場合も多数存在した。これらのことから、動画提示調査には一定の有効性があると考えられ、今後のオノマトペ調査においても有効な手法の一つとして活用できる可能性がある。

5 まとめと今後の課題

本調査では、気仙沼市方言におけるオノマトペの清濁対立の実態を分析し、世代間の違いを検討した。その結果、以下の点が明らかになった。

- ・ 高年層～若年層の話者の多くにとって「びかびか」は馴染みのある語形ではなく、雷の光の様子を表すオノマトペとしては「びかびか」「びがびが」の 2 つの対立が主に認識されていた。
- ・ 「びかびか」「びかびか」「びがびが」の 3 つの対立を持つ話者も存在し、特に少年層においては雷の光の様子を 3 段階の対立ととらえている話者が半数程度存在した。
- ・ 少年層では高年層～若年層と比較し「びがびが」の使用が衰退していた。一方で、「びかびか」系列にこだわらず光の様子を様々なオノマトペで表す話者が多数みられた。

今回の調査では、雷の光の様子を表すオノマトペ「びかびか」「びかびか」「びがびが」のみを対象としたが、今後はこれらに限らず、同様の清濁対立を含む他の子音系列のオノマトペ対について

も調査を広げていくことが期待される。

また、4 節に述べたとおり、今回の調査では映像刺激を用いてオノマトペの回答を促す方法を採用したが、話者が語形を選ぶ際には、雷の光の強さだけでなく、稲光の継続時間や明滅の回数、視覚的印象など、複数の要因が影響する。したがって、今後の調査では目標語形をよりの確に引き出すために、それぞれの語形にふさわしい映像内容を精密に設計・統制する必要がある。特に、稲光の強度や回数、持続時間などを細かく調整した動画を作成することで、各語形と刺激との対応関係をより明確に把握できると考えられる。

注

- 1 第 2 語基音が t-d の対立となっているオノマトペ対についても 3 つの対立が認められたが、これらのオノマトペならびに同時に調査した一般語「井戸」の発音においては鼻音を伴う回答が認められなかったため、今回の調査の目的に照らして、対象から除外した。
- 2 調査の都合上、2 名の話者（中年層 1 名、若年層 1 名）に対しては動画ではなく画像を用いた調査を行った。いずれも目標語形が複数得られたため、本稿の分析対象に含めた。

文 献

川越めぐみ (2012) 「東北方言オノマトペの形態と意味」 東北大学博士論文

工藤真子・楊博葳・大久保泰斗・日野太木 (2024) 「オノマトペの音韻対応」『文化庁委託事業報告書 東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 2』、東北大学方言研究センター、5、pp.8-19

浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトペー音象徴と構造ー』 くろしお出版